黒田住職産経新聞『この人に聞く』に登場

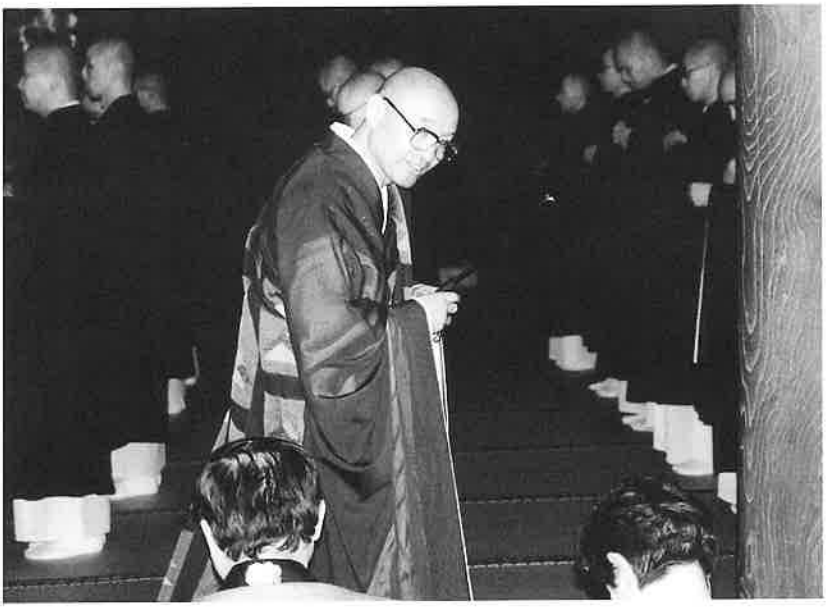
平成14年５月20日付の産経新聞にて、黒田住職へのインタビュー記事が掲載されました。ここに転載してご紹介します。

横浜市港南区善光寺、黒田武志住職（六四）は「留学僧育英会」の理事長を務める。今年で十八周年を迎えた同会は、宗派を超えた留学僧を派遣したり受け入れたりしており、その数はアジアを中心に世界二十一カ国・地域の百六人にのぼる。この功績から曹洞宗特別奨励賞も受賞した。自らもタイや米国で修行した黒田住職に、その経験や日本人の国際性について聞いた。

人間一人じゃ生きられない

――なぜ育英会を？

「大学院を修了後、福井県の大本山永平寺に修行に行ったが、折り合わず半年で飛び出してしまった。帰郷する旅費もなくて、全国を托鉢（たくはつ）して周り、日本中の人の親切が身に染みた。その時の『人間は一人じゃ生きられない』という



思いが原点です。開教師として渡った米国でも、金がなく助けてもらった。その恩返しのためにも世界に通ずる人をつくらなければという気持ちなんです」

――育英会の制度は

「仏教の学者と僧を日本から派遣し、海外からも受け入れている。留学僧を預かるだけではなく、まとめて奨学金を渡して協力してもらっている学校や寺院に派遣してます。学校を作るとなると大がかりでも、留学制度なら身近に世界的な教育を実践できますから」

――実際に運用してみてどうですか

「タイや韓国に帰っていく留学僧が『母国に帰ったら、先生がしているように困っている学生を助けてあげたい』と言ってくれるのが一番うれしい。この輪をさらに広げていきたい。半面、やはり経済的な問題では苦労しました。最初は駒沢大学関係者など縁で出会った人々に相

談をしながら、檀家の方々とも協力して今日まで続けてこられた」

「衆生救済」世界に広げる

――僧侶としては異色ですね

「当初は一年もてばいいなどと冷たく扱われましたが、今は理解してもらえた。最近の僧侶は形に捉われすぎて役人のようになってしまった。資格を取ってしまえば生活に困らないという体質。宗教家は衆生救済という原点に戻らなくちゃいけない」

――内外の留学僧の違いはどうですか

「海外からの留学僧は国から選ばれてきたということもあり姿勢が真剣。一方、日本人は自分から幸せをつかもうという力に欠けている。夢が組織や風習に負けてしまうから個性が生かせない。島国的な根性で世界の動きにも対応できない。心をおおらかに互いの良い所を見るべきです」

――今後の夢は？

「世界に通用する人を育て続けることに尽きます。横浜で一番でなく、世界という目標を持って初めて大きなことができる。口だけではなく実際に行動に移すことが大事。人々の幸せのために働けば、結果はおのずとついてくるものです」